

## 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

### 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	上越市立大町小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	中型動物の飼育を中核とした生活科実践の可能性

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

##### 1、活動に至る経緯

小学校生活科における「動植物の飼育・栽培」は、学習指導要領において重要な内容の一つとして位置付けられており、大きな教育的成果が期待される一方でいくつか課題が指摘されている。例えば、小学校学習指導要領（2017年改訂）では、動物飼育について「これまで一部に動物の飼育をせずに栽培活動のみを行う事例や、動物との関わりに継続性を欠き、短期的な触れ合いにとどまる事例が見られたとの指摘がある。また、「自然や生命に接する機会が乏しくなっている現状を踏まえ、動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることが一層重視され、指導の充実に向けた配慮が求められている。」と大きな課題についても指摘されている。このような指摘の背景には、「学校飼育動物」（学校が恒常的に飼育を継続する動物）が少なくなり、校庭の小動物（小型無脊椎動物等）を短期的に観察する授業が一般的に行われる中、それが「飼育活動」といえない状況となっていることが挙げられる。これらのことから、中型動物の飼育を中核とした生活科の学習活動の実践を通して、生活科の学習活動が動物との短期的な触れ合いにとどまらない実践を展開する上での要件の考察や、地域の人々と共に学習活動をつくり変えることの可能性について提案したいと考え、「らんらんポニーランド」の活動を構想、展開した。

##### 2、活動・研究の目的

活動・研究の目的は、中型動物の飼育を中核とした生活科の学習活動「らんらんポニーランド」の実践を通して、生活科の学習活動が動物との短期的な触れ合いにとどまらない実践を展開する上での要件と、その可能性について明らかにすることである。

##### 3、活動内容

活動時期は、1年生の子どもたちが入学して2週間ほど経った4月の中旬から翌年3月までである。おおよその月別の活動は以下の通りである。

- ・4月「ポニーを迎え入れる環境をつくる」（読み聞かせ、準備活動の話合い、牧場へ手紙を書く）
- ・5月「ポニーとの出会い、触れ合い」（ポニーの入学式、名前付けの話合い、全校、地域へのお知らせ）
- ・6月「ポニーとの生活をつくる」（日常のお世話、ポニーと遊んだり散歩したりする）
- ・7月「ポニーとの生活をつくる②」（遊び場を広げるための柵づくり、小屋の手入れや拡張）
- ・9～11月「ポニーとの生活をつくる③」（幼稚園の園児にポニーの乗馬体験や引馬体験を行ったり、ポニーにかかわる遊びを共に行ったりする、学級でお揃いのTシャツやポニーの衣装などを作成する）
- ・12月「ポニーとのお別れ」（ポニーと別れる会の準備をする、ポニーにかかわった人をお別れ会に呼ぶ）
- ・1～3月「1年間の活動を振り返り、自身の成長を見つめる」（ポニーや牧場の方へ手紙を書く、ポニーをモチーフにした遊び場を学級につくる）

#### 4、子どもたちへの効果（成果・課題）

活動・研究を通して明らかになった要件は、以下の二つである。

一つは、「子どもが日常的に動物とかかわりをつくることのできる環境の設定」である。子どもは、生活科の学習の時間があるからポニーとかかわるのではなく、「会いたいから会いに行く」「一緒に遊びたいから一緒に遊ぶ」と言うように、湧き上がる自らの思いや願いによってかかわろうとした。教師は、子どもがそう思ったり、願ったりした時にかかわることのできる学習活動の設定や、かかわる場の広がりや思い描いていく必要がある。教師が、時間や場といった視点から学習環境を整えていくことで、子どもが長期的に、持続した関係を動物とつくり出していくのである。

二つは、「動物とかかわりをもつ年間活動計画の構想・展開」である。子どもは、年間の活動を通して、ポニーの気持ちに寄り添い、ポニーの気持ちを自分事のように考え、自分が何をすべきなのか考えて生活するようになった。子どもの生活を1学期（4月～7月）、2学期（9月～12月）、3学期（1月～3月）の区切りで考察した時、「自分にとってポニーがどんな存在か」を表す言葉が、「飼育する動物」から「共に生活する仲間」、「共に生活をよりよくしていくことのできる仲間」に変わっていった。共に生活する時間が、ポニーとの関係を「上下」から「水平」に変容していき、「水平」がより強固に一体となった関係性をつくり出していった。また、年間の活動を通して、生活の場が広がっていくことによって、自ずと地域の人々との交流がうまれていくことにもなった。家族や近所の人などの身近な人から、近隣の幼稚園児や社会で働く人々まで、様々な人とかかわりがつくられていった。その中で子どもは、他者の喜びのために自分ができることを考えたり、共に生活をよりよくしていく仲間の存在を実感したりしていった。このように、通年で動物を飼育していたことが、短期的な触れ合いではつくることのできない、学びを深める子どもの姿の実現につながったのである。子どもが年間を通して、動物とかかわりをもつ活動計画を構想し、展開していくことが重要である。

また、上記の二つの要件を満たす生活科実践において、教育的意義の可能性が広がったことも明らかになった。

それは、「中型動物との生活が教室外での学習活動を生み出していくこと」である。年間の活動・研究を通して、子どもは、全身でポニーと触れ合ったり、触れ合ったことからポニーに対して自分がしたいと思うことを湧き上がらせたりしながらポニーと共に生活をつくっていった。「ポニーさんにとって今の小屋は狭すぎるから、もっと広い所で生活できるようにするにはどうしたらいいかな」「もっと広い所で散歩してみたいな」というように、子どもはポニーの身体の大きさを基にして生活する場を広げていくことを志向した。実際に、築山の周りに立てた柵を作ることになった際には、木材を調達するために地域の大工さんへお願いしたり、木材を仲間と協力して地面に立てたり、ポニーが逃げないように木材の組み合わせ方を考えたりした。校外への散歩では、ポニーが喜ぶところはどこかを考えたり、安全に気を付けて歩いたり遊んだりする決まりについて知ったりした。このように、中型動物の特性に応じて、子どもの生活する場が教室外へと広がっていくことになり、子どもの新たな学びをつくっていくことになった。中型動物との生活には、子どもが教室の中ではつくることのできない学びをつくっていくという、教育的な可能性があるだろう。



校外で散歩している様子



築山に柵を作っている様子



柵の中でポニーと戯れている様子